
正義の味方の造り方

山崎 優喜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義の味方の造り方

【Nコード】

N2639F

【作者名】

山崎 優喜

【あらすじ】

勉学・バイト・恋愛・家事…、ひとり暮らしの学生が成すべき事柄に何一つやる気を出せない無気力学生「仲原悟」。そんな悟の部屋に、ある日女の子が窓ガラスを破って飛び込んできて…

01 (前書き)

<変更内容>

・08年10月27日

雑誌のあおり文を「」ではなく『』で囲むよう修正。ストーリー等に影響なし。

窓を突き破って、突然女の子が部屋に飛び込んできた時、自分の頭がイっちゃてるんじゃないかと本気で心配した。

*

「はあ、今日もつまんねーな」仲原悟なかはらごうとは呟いた。

6畳強の部屋はお世辞であっても広いとはいえないが、それでも一人暮らしをするには十分だ。悟の独り言は物が少ない部屋に響いた。最近この手の独り言が増えた。なにをするにも余りやる気がでないし、また、やる気を出すのも億劫と感じてしまう。

「とりあえずコンビニで弁当買うか」と言いつつ、雑多に物が放り込まれた机の引き出しから財布を取り出し、上着を羽織ってコンビニに向かう。

悟の部屋のある一階からは、狭い共用廊下を抜け、部屋毎に割り当てられた郵便受けの前を通ってポロアパートの外に至ることになる。

地方都市にある大学に進学する際、実家を出て一人暮らしをはじめた。

当初は面白がって自炊や掃除もこなしていたが、もう一人暮らしから1年も経つとすっかり怠け癖がついた。

コンビニがつぶれたら、飯が調達できなくなって餓死してしまうん

じゃないかと思うほどコンビニ弁当にはお世話になりっぱなしだし、掃除が行き届いていない部屋のあちこちに埃が積もって層をなしている。

法学部生には必須と買わされた六法も、本棚の隅で埃の化粧を身にまとっている。最後に悟が使ったのはいつだったか。

悟御用達のコンビニまでは徒歩で3分とかからない。

「いらっしやいませー」

業務的な抑揚のない声に迎えられ、悟はとりあえずお薦め弁当のコーナーに向かう。

最近のコンビニ弁当は馬鹿にできたものでなく、彩りから荣誉面まである程度考えられていた。

季節のお楽しみ弁当にしようかパワースタミナ丼にしようかを悩んだあげく、パワースタミナ丼を選択した。

レジに向かう途中に週刊誌やら雑誌のコーナー。

週刊誌の表紙を見ると、

『謎の発光体また目撃！近隣住民大パニック！！』

『政府が情報を隠蔽する本当の理由を緊急暴露！！』などのセンセーショナルなあおり文句が極太明朝体で踊っている。

またこの事件の特集か、と内心で思いつつ、レジでパワースタミナ丼のお会計を済ませた。

この事件とは、最近頻繁に目撃されている未確認発光体の事である。なんでも、緑がかった3mくらいだかの発光体が突然上空に現れるらしい。発光体は何をするわけでもなく、ただひたすら旋回してはフッと消えてしまうようだ。

「んなバカな事ねーよな、この科学万能の時代に」と先ほどコンビ二で調達した晩飯をほおばりながら悟は呟いた。

内心で思ったことをすぐ独り言として吐き出してしまうのは、一人暮らしの悪い癖だろうか。

子供の頃はUFOだUMAだの類の話は大好きで、まして小学校高学年までサンタの存在を信じて疑わなかった悟だが、もうすっかりそついった話には興味がない。

興味がないというか、フィクションとして分かった上で楽しむことはあっても、本当に、謎の発光体が目撃されて近隣住民が大パニックしているのだ、政府が情報を隠蔽しているのだ、実際にいま世の中に起こっていることとは認識しえなかった。

「味付けが濃いなあ」

と380円のコンビ二弁当に一人前に講評をたれつつ、すっかり全て平らげるのに5分とかからなかった。

プラスチックのごみをポリ袋につっこんで、テレビをつけた。

最近は似たようなバラエティー番組ばかりだが、別段やることのない

いい時にはいい時間つぶしになる。

親からの仕送りのおかげでバイトもしていないし、六法が埃をかぶっていることから分かるように勉強もろくにしていない。

大学に進学したのだから、別に勉学に励みたいだの、弁護士になりたいだのと崇高な目的があったわけではなく、まわりが進学するので自分もという安易なものに加えて、モラトリアムの延長を只願っただけにすぎない。

まさにダメ学生の典型例だ。

「はは、おもしろえ」

ブラウン管の中では、スーツを着たお笑い芸人が、面白いボケをかます俳優をつかまえてクイズ番組をしていた。

最近、やたらとクイズ番組が多い気もするが気のせいかな。

飯を食って、テレビを見ていると眠くなった。

悟は寝ることに決めた。

安いベッドの上に寝っころがった。

照明を消した。

外から虫の音が聞こえる。もちろん虫の種類なんて分からないが。

まん丸の月もでていし、風もそよそよやわらかい。

風にゆれる草葉が、まるでクラシックを奏でているようにやさしい音を発している。

そんなゆったりした静かな空間のおかげで、すぐに悟は夢の世界へ向かう……はずだった。

突然、部屋の中に雷が落ちたような破裂音が鳴り響いた。

慌ててベッドから体を起こすと、窓ガラスが見事に割れていた。粉々だ。

身にふりかかった事態を瞬時につかめるわけもなく、泳いだ目であたりを見回す。

ん？何だ？人？

ベッドを降り、ゆっくり対象物へ近づく。

外の静けさとは逆に、心臓の音がやけにうるさい。突然パンクバンドのライブが始まったかのように騒ぎ倒している。

息を殺し、ようやく目視確認できるまで近づいた。

瞑っていても大きいと分かる目、小ぶりだが形のいい耳、筋の通った鼻、暗闇からでも潤沢な水分量が分かるぷるんとした唇、柔らかそうなショートカットの髪、線が細くか弱い感じの小さい体……

間違いなかった、人だ。女の子だ。

僕の目の前に、女の子が横たわっている。

状況から考えて、窓ガラスを突き破って入ってきたんだろう。

そんな通常ではありえない解を思考回路がはじきだしたとき、切実

に思った。

自分の頭がイっちゃてるんじゃないかと。

続 *

01 (後書き)

はじめての小説執筆（しかも連載）ということ、お見苦しい点ばかりかと思いますが、自分なりに励みます。

よろしく願います。

*

今、起こっていること、それが俄かには信じられない。

大学の講義をさぼりまくり、家事もさぼりまくり、最近脳みそを使う機会が激減しているもんだから、自分の脳みそが弱って発酵してしまっている可能性も捨てきれない。

いや、むしろ大いにある。

となると、休み過ぎてタルんで弱って発酵してしまった脳が幻覚でも見せているのか…。

って、それってやばいよね！？僕やばいの？大丈夫なの！？

よし、まあまあ、とりあえず深呼吸だ。

とりあえず落ち着こう、落ち着こう僕。

大きく息を吸い込む。胸が大きくふくらんで、頭に酸素がいきわたった感じがした。

心臓の鼓動も、パンクバンドのリズムからロックバンド並みには落ち着いた。

7×1^{||}7、7×2^{||}14…、小学校の頃に苦手だった7の段もすらすら言えるし、どうやら脳内の回転数にも異常はないようだ。

つまり、つまりだ。このあり得ない状況は今まさにあり得てしまっているということか。

落ち着いた途端、照明が沈黙したままになっていることに気づいた。

照明さえつければ、状況はよりの確に把握できる。

羽虫が羽ばたくような低い音をたて、照明に電気が通る。

そして僕は、見た。

間違はなく、女の子が目の中の床に転がっている。

蛍光灯に照らされた彼女は、やはり文句のつけようのない程美少女だった。

ただ、服装は変わっている、か。悟自身、ファッションには特に興味があるほうではなかったが、それでも彼女の服装が特異であることぐらいは分かる。

そうだな、なんか、軍服みたいだ。

男子校の制服を高級にしたようなブレザーにネクタイ。そして、胸ポケットのやや下あたりに、立派なエンブレムがついていた。あと、複数個の星の飾りも。

視線を移す。

肩が小さいスパンで上下しているから、どうやら息はしているようだ。

やわらかそうでいい匂いがしそうな髪には、金平糖サイズに砕けたガラスが入り込んで、まるで砂金のような照明を反射して光っていた。

外傷は特にないか…、いや、よく見ると額がほんの僅かに切れていた。

もつとも、表面張力によってプクツと血が盛り上がっている程度だから、それ程深い傷ではないだろう。

雪のように白い肌に、血の球の赤がワンポイントでコントラストをなしていた。

となる。

窓の方を見た。やはり、見事なまでに割れていた。

部屋の外側ではなく中側にガラスが散乱しているという事は、いわずもがな彼女がガラスをつきやぶって部屋に飛び込んできたという事で間違いなさそうだ。

小学校の頃、サッカーボールで近所のおっちゃんの家をガラスを破ってしまったことがあったが、なるほど、ガラスに体当たりする物の質量が違つと、こつも威力が違つのか。

雷みたいな音が鳴つたのも、頷ける。

音が原因で誰か起きてこないか、と一瞬心配したが、すぐさま自分で否定した。

幸いなことに、今住んでいるこのボロアパートは入居人数が極端に少ないのだ。

別段、特に悪いところもないのだが、数年前からぱったり入居者が途絶えているらしい。

家賃も高くないしコンビニも近いのに。

肝心の大家さんに関してだが、悟は、入居のときに挨拶して以来見ていない。それくらい、このアパートに関しては無関心なのだろうと悟は解釈している。

そんな分けだから、さっきの騒音で誰かが文句を言ってきたり、大家さんが文句を言ってきたりというのはなさそうだ。

あたりは相変わらず深夜の静けさを保っている。

身に降りかかった状況がある程度把握し、悟は意を決した。

そうなのだ。夜中にこうして僕をたたき起こしたこの女の子を、起こして尋問せねばなるまい。

悟は女の子に手を伸ばした。

おそろおそろってこんな状態なんだろうなあ。

触れた。二の腕に触れた。

女の子って柔らかいなあ、まるでスポンジケーキみたいだ。
いやいや、そんな事考えている場合じゃない。

ゆすった。何回もゆすった。

授業中に居眠りする男友達を起こすのとはわけが違った。すごく軽い。

反応なし。

ちょっと、ちょっと待て、これ本格的にやばいんじゃない。

「ねえ。大丈夫？おーい！おーい！！」悟は声を大にして呼びかけた。

起きてもらわないと事情が聞けないなんてのは、もはや脳裏にはない。

だってそうだろう。このまま起きなければ然るべき所に通報せねばならない。でもさ、こんなの救急隊員やお巡りさんになんて説明すればいい？

『軍服らしき服を着た美少女が一人、さっき僕の部屋の窓ガラスを突き破って入ってきて気絶しています。とにかく美少女なんです、早く来てください！』……俺が警官や救急隊員なら行かないね。行くとしたら、そんな変な妄想通報してきた奴を迎えに行つて病院に入れるね。

つまり、起きてくれないと非常にまずい！

「うーん……」

女の子がうめく。助かった！彼女も僕も！

「もしもし！大丈夫？」

言いつつ悟は手を止めない。

「……んー、わたし……、ここは……」女の子は眩きながら上半身を起こした。

まだあまり焦点が定まっていないう目で、僕の部屋を見回す。

そして、その視線が僕に移る。
なんだ、なんか微笑んでる？

それにしても、極大にカットしたダイヤモンドみたいにキラキラした目だ。面積だって、そんじょそこらの目の1・5倍はあるんじゃないか。

つい見とれてしまっていた僕に、彼女が驚天動地の一言を言い放った。

「は？」

音としては認識できたけれど、意味が全く理解できず聞き返す。

彼女がそのプリンみたいな唇を動かし、そして発した。

「こんばんは、仲原悟。あなたを迎えに来ました！」
そんな言葉を、彼女は再び口にした。

＊ 続

02 (後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

2話目です。

1週間に1話ペースが自分には合っているみたいです。

推敲はしているつもりなのですが、アップした後に誤字脱字を見つけてしまうことが多いです。
何とかせねば。

03 (前書き)

<変更内容>

・08年10月27日(アップ直後)

携帯から縦書き表示で閲覧すると、異様にスペースが空いて見えた箇所を修正。

『内務法政省防衛局特別戦略防衛課』にルビ振り。

*

「迎えに？僕を？君が？どこに？っていつかそもそも君誰なの？」
いま頭に浮かんだ質問全てを、一息で浴びせかける。
かの聖徳太子でもこれ程の連続質問に答えられるかどうか。

しかし彼女は笑顔を崩さず発した。
僕がどのような質問をするのかなんて、想定済みという事なのだろうか。

「時間があまりないので手短かに答えます。私の名前はいちじょうゆい一条結ないむほ内務
法政省防衛局特別戦略防衛課に所属しています。」

よく噛まずに言えるな、とちよっと思う。

「なかはらけん仲原悟、あなたを我々のプロジェクトのメンバーとして迎えに来
ました！」

『迎えに来ました！』の語尾にハートの絵文字がつくんじゃないか
って思うくらいいの、鼻にかかった甘い声だ。

ひとしきり言い終えたのか、彼女は僕を見つめている。

リアクションを待っているのだろう。

僕は、高校時代に学んだ現代社会の知識を脳の隅っこから引っ張り出した。

たしか、内務法政省防衛局とは旧自衛隊の業務を引き継いで編成されていたはず。とどのつまり、軍隊のようなものだ。

しかも特別で戦略的な防衛をする課って事は、察するに鍛え上げられたエリート中のエリート達の集団って感じではないのか。

なんでそんな所が

「なんでそんな所が僕を？」

「我々のプロジェクトに、あなたの協力が必要不可欠だからです。前のめりになった彼女の顔が近づき、瞳の中に屈曲した僕の顔が映りこむ。

彼女は続けた。

「プロジェクトの内容については、本部で担当者が説明します。私と一緒に来て下さい。」

至近距離で見つめられ、とにかくドキドキする。

まあ、しかし、なるほど。

どうやら僕はエリート部隊所属の美少女からスカウトを受けているようだ。

ふーん、僕をね。

そんなの答えは決まっている。

僕は発した。

「ごめん、無理です。」

それは当たり前前の帰結だ。

僕はモラトリアム堪能中の、単なる無気力学生なのだ。

高校の頃、黒帯に憧れて空手部に入部したが二ヶ月でドロップアウトした程の体力しかないのだ。

頭脳については、中堅私立文系という中途半端なスペックなのだ。

だから、そう、当然の結論だった。

僕には絶対無理だ。

そんな僕の言葉を受け、しばしの沈黙。

冷蔵庫が氷を作り出す音が部屋に響く。

割れた窓ガラスから吹き込む夜風を受け、カーテンが揺れる。

ゆらゆら、ゆらゆら、揺れる。

沈黙に耐え兼ねて、僕は言ってしまった。

「だ、だってさ、どんなプロジェクトか分からないのに返事なんて出来ないじゃん！」

今思い返すと、これがいけなかった…。

直射日光下で急速に溶けるアイスクリームみたく、彼女の表情が急に笑顔に戻る。

「たしかに、何も知らせないまま連れていかれるのは誰だって嫌よね」

勢いに押され、思わず頷く。

「率直に、端的に述べます。あなたには『正義の味方』になってもらいます！」

つてな事を満開のひまわりを髣髴とさせるスマイルで言う。

もしや…、いや恐らく高確率で、沈黙を巧に用いた交渉術だったのではなかるうか。

実際僕は、『正義の味方』という響きに毒気を抜かれてしまった。

「僕が、正義の味方に…？」

「そうです。あなたはこれから」

突然彼女の言葉が詰まった。

額に手をあてたかと思うと、ぎゅっと目を瞑り、そして呟いた。

「やっぱり、出た。ちよつと予定より早いじゃない」

予定？出た？何だ？

今日は疑問符がよくつく日である。

「あのさ、出たって何ぐわあっ」

言い終わる前に腕を引っ張られたもんだから、思いつきり舌を噛んでしまった。

「いいから、あなたは私と一緒に来るの！あなたが必要なの！」

もし、『男の子が女の子に言われたい台詞ランキング』なるものがあれば、かなり上位に食い込むのではないか。

結のような美少女にそれを言われ、悟の頬が赤らむ。

そのまま彼女は僕の腕を引き、玄関を抜け、共用廊下の端に位置している階段を2段飛ばしの猛スピードで駆け上がる。

この華奢な体のどこにこんな力が宿っているのか。

「ちよつと、ねえ、はあはあ、あのさ、なに、そんなに慌てて……」
息を切らして、僕は言う。

しかし、彼女は僕の発言など意に介さない様子で、まったく速度を

緩めない。

無気力モラトリアム学生 vs 軍人美少女じゃあ、運動能力に明白な差があった、当たり前だけ。

あつという間に屋上に通じる非常ドアの前まで上り詰めた。

薄い鉄製のドアには、大きく赤色で『危険。関係者以外立ち入り禁止。』と書かれている。

通常一般人ならば、ドアの前で躊躇するであろうが、いかんせん彼女は通常人ではない。

なにせ、人の家の窓ガラスを突き破って侵入してくる猛者なのだ。

当然、悟が息を整える時間などなかった。

フライパンを地面に思いつきり叩き付けたような金属音が鳴り響く。案の定、それは彼女がドアを蹴り破った音だった。

錆びきっていた南京錠が階段の片隅に転がる。

「さあ。屋上までもう少しよ。」

再び悟の手をとり、結が呟く。

そして、屋上に、出た。

夜の、ひんやりとした空気を体中に感じる。ボロっちいアパートのくせに3階建てなもんだから、見晴らしはそこそこ良い。

右手の方に見える山の斜面には、ぼつぼつと住宅の明かりが灯っていて、まるで山がスパンコールで飾られたドレスを着ているようだった。

ああでも、非常に疲れた。無酸素運動で…。

心臓も大はしゃぎだ。

おもむろに僕の腕を離し、彼女は言った。

「もう直ぐ迎えが来るから。」

迎え？

どこからそんなものが来るのかと、あたりを見回す。

すると、ボロアパートには似つかわしくないモノを足元に見つけた。

黄色い太線で正方形が作られ、その中に円に囲まれた『H』の文字。文字だけでおそらく5mはありそうな大きさだった。

もしかして…。そうだ、ヘリポートだ。

でもこんなボロアパートにどうして。

もっとも、そんな事よりだ。

やっと彼女のバカ力での引っ張りから解放されたのだから、言っ
やらねばならない。

「あのさあ」

彼女がこちらを振り向く。

「だいたい、まだ、僕、行くとは一言も言っていないぜ」
よし、言っ
てやった。

彼女はため息をつき、呆れたという様子で上空を指差した。

彼女の指を追った。

するとそこに、近頃騒ぎになっている例のアレがあった。

スプレーから噴出されるガスに思いつきり粘度を加えた状態、という表現がしつくりくるだろうか。

ガスと雲の中間のような物体が、確かに緑色に発光し浮かんでいる。週刊誌なんかが報じている未確認発光体の特徴そのものだ。

その物体が何だか、僕達に向かつて来ているようだった。もしくは、徐々に巨大化しているのかも。あるいはその両方…。

「ねえ、あれってさ」

僕の質問を遮るように、けたたましいプロペラ音を伴ってへりが頭上に。

「質問は後、はやく端に寄って！」

ひざ小僧が隠れる長さのスカートを押さえつけ、彼女は叫ぶ。

ショートカットの髪も、右に左に大暴れしていた。

それにしても彼女の声はよく通る。やっぱり腹筋の力の差だろうか。

言われるまま屋上の端っこに寄るやいなや、へりが屋上に着陸した。へりの側面には、『特別戦略防衛課』の文字。

ドアが勢いよく開き、中に乗っていた男性が僕をへり内部に引っ張り込む。

彼女も僕の後に続き、へりに飛び乗る。その様を確認し、すぐさまへりが浮上。

へりが浮上し、ボロアパートを離れたのが僅かに早かった。

発光体が、すっかり屋上一面を覆いつくした。

緑から紺、黒、紅と目まぐるしくその色を変化させている。

『H』の文字など、もはや全く確認できない。浮上によって、見慣れた景色が見る間に小さくなっていく。

「お怪我はありませんか？一条少尉。」

僕を引っ張り込んだ男性が彼女に問いかけた。迷彩服を着たガタイの良い兄ちゃんである。

「ええ、ギリギリだったけど。」と彼女も応える。

「予定通り、本部に向かって！仲原悟は無事に収容したって連絡も忘れずに。」

とパイロットに向かって言い放つ。

「了解。こちら3番機、3番機、対象者保護、対象者保護、これより本部に向かいます、どうぞ。」

「こちら本部、3番機了解。」

雑音を伴いながらの無線のやり取りが終わるのを見届け、彼女が僕の顔をのぞきこみ言った。

「まだ行くとは言っていない、だっけ？」

人間をからかう小悪魔は、きつとこんな笑顔をたたえているのだろ
う。

「なんなら引き換えそうか？すっごい危険だけど」

僕は大きく首を横に振った。

目の前に発光体があらわれ、自分が住んでいるポロアパートの屋上
を覆いつくしたのだ。

それを僕は、見たのだ。

このまま、何もわからないまま、何も理解しないまま、帰ることな
んでできない。

もちろん恐怖もあるけどさ。

それに、僕は怖さと同じ分だけ、わくわくもしていた。

もうすっかり信じなくなっていた超常現象、それに巻き込まれたこ
とに。

そして、何より、僕を『正義の味方』として迎えに来たという一条
結との出会いに。

「そう、良かった！」

彼女は微笑み、前に向き直った。

続 *

03 (後書き)

三話目です。

最近、アクセス数が伸びて来ています。

読んで下さっている皆様、ありがとうございます。

さて、アップした小説を修正する際、前書き部分に修正内容および日時を表示することとしました。

スペースの空き過ぎやルビの振り忘れ等、凡ミスが続いております
がご容赦ください。

ではまた四話にて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2639f/>

正義の味方の造り方

2010年12月18日20時54分発行